

掲載したのは、自分が行きたいと思ったお店だけ。
11/29、『南大阪のおいしいお店3』発売。

小田原 大輔さん



キット・コーポレーション 合資会社代表
「キットプレス」編集長 小田原大輔さん(昭和41年生まれ)

PROFILE

岸和田市生まれ。高石市在住。地域情報紙の広告営業やアパレル・雑貨の営業などを経て、2001年に起業。フリーマガジンやグルメ本の発行、地域密着の情報ポータルサイトの運営に従事。座右の銘は「先義後利(道義を優先させ、利益を後回しにすること)」。

■泉州地域のとっておき情報をポータルサイトとグルメ本で発信

地域のとっておきの情報を、この街に暮らす人たちに届けたい……。わが「らくらうえる」と同じくこの南大阪に拠点を置き、地域情報を細やかに発信中のポータルサイト「キットプレス」。泉州地域堺市、高石市、和泉市、泉大津市、岸和田市ほか)のことならお任せあれと、編集長として地域を駆け回る忙しい日々を送っているのが小田原大輔さんだ。

「2001年に会社を立ち上げてから11年。長かったようで、早かったかなあ。これまで、この仕事を通して多くのお店、多くの人と出会うことができました。『反響があつたよ』と喜んでくださる掲載店さんや、『とても素敵なお店でした』と報告してくれる読者の存在が、よし、また頑張ろうという気持ちにしてくれるんです」

そのキットプレスから、11月29日にグルメ本『南大阪のおいしいお店3』が発売される(南大阪の書店・コンビニ、大阪市内の主要書店にて)。前回の『南大阪のおいしいお店2』から2年ぶりの刊行。満を持して、「地元のおいしいお店90軒を紹介する」。

「じっくりと5ヶ月かけて制作しました。今回は巻頭で富田林や河内長野など南河内エリアのお店を特集しています。巻末には南大阪の「極上スイーツ」を網羅しました。ぜひご覧になってください」

本づくりのベースにあるのは、「自分が手に取りたいなと思える」本をつくること。自分が訪れてみたい、行ってみたいなど感じるお店を、読者目線でセレクトしているぞうだ。

「本の制作は今回で9冊目になるのですが、毎回毎回、本当に大変な作業でして……(笑)。でも、何回も取材させていただいているお店さんが『待ってたよ』と言ってくれたり、初めて掲載させていただくお店さんも『ずっと読んでいました』と歓迎してくださる。読者からも『次

の号の発売はいつ?』なんて問い合わせがくるんですよ。そうすると、じゃあまた気合いを入れてつくらなきゃって考えてしまうんですよ(笑)」

■大手術後に選択肢なく起業

赤字を乗り越えて11年

地域密着のポータルサイトを運営し、地域のグルメ本を9冊も発行してきた小田原さんだが、起業したきっかけはなんだったんだろうか。

「26歳の時、大阪の北摂地域で情報誌の広告営業の仕事をしていました。その時のエピソードなのですが、自宅をつくったチーズケーキを売っている小さなお店が誌面で紹介されたのを機に、2号店、3号店までオープンしてしまふ繁盛店になったんです。それって、すごいことですよ。地域誌のもつ影響力に驚きましたし、同時に責任の重大さも感じさせられました。そして何より、地域にある小さくても素晴らしいお店を多くの人に伝えられるなんて、非常にやりがいのある面白い仕事だと思っただけです」

この時から、「いつかは地元の泉州で情報誌をつくりたい」という夢が膨らんでいく。しかしこの頃は、自分が情報誌を発行するなんてあくまで「夢」だと考えていた。諸事情から一旦、広告営業の仕事と離れていくつかの会社を転々。アパレルや雑貨などの営業をしていたという。そんな小田原さんに転機が訪れたのが35歳の時。勤務先で受診した定期健康診断の結果、「大きな腫瘍がある」と告げられたのだ。そして、大手術を受けることに。

「退院後も体が痛くて、なかなか仕事に復帰できなかつたんです。しばらくは傷病手当を受給しながら、リハビリに励む日々。結局、会社に復帰できず、退職することになったのです。その時すでに35歳。再就職というのははな

なか難しい状況だったんです」

そこで頭をもたげてきたのが「起業」という選択肢。それまで、自分で会社を起こすなんて考えてもいなかったというが、「大きな手術を経験したことで、もう死んだ気になった。だから思い切って、昔抱いた夢に挑戦してみようと思った」と、小田原さんは振り返る。

そして、登記も自分で行なって、地元泉州の高石市で小さな会社を立ち上げたのが2001年。地域のお店を回って広告を集め、まずは「たかいしまる得MAP」を約2万部制作した。翌年には全16ページのフリーマガジン「キットプレス」を約12万部発行。こちらは季刊誌として第5号まで続けた。

「いやあ、もう毎回200〜300万円の赤字でした(笑)。でも、広告を出してくださったお店さんが1店舗でもある限り、発行しないわけにはいきませんから。それに、回を重ねるからこそお客さんとの信頼関係もできてくるし、待つてくれる読者も増えてくる。軌道に乗るまでは踏ん張って、まずはキットプレスの名前を知ってもらおうと思いました。でも、そんなふうには制作が続けられたのは、お客さんや読者の存在はもろろのこと、どう転ぶかわからない私をいつも笑顔で支えてくれた妻の存在も大きいですね」と、同社の右腕でもある妻への感謝も忘れない。

フリーマガジンの最終号と同時期に、グルメ本の第1号となる『泉州のおいしいお店』を発売した。ラジオ番組で紹介されたこともあり、予想以上の反響を呼んだという。

「梅田や難波、心斎橋といった都市部のお店を紹介する本はたくさんありますが、泉州地域のお店を紹介する本はそれまでなかったんです。地域の情報を求めている人は多いんだというのを改めて知り、この仕事にさらにやりがいを感じるようになりました」

以来、2年に1冊のペースで本をつくり続け、ネット上ではポータルサイトも充実させてきた。

「出版不況の時代と言われますが、インターネットにはインターネットの、紙の本には紙の本の良さがある。それぞれの良さを最大限に出せるように工夫しながら、今後も良いものをつくりていきたい」

自分で会社を運営することは、大変だけれども次の一手を考えるのが楽しくもあると話す小田原さん。

「らくらうえるさんとは、お互いに地域密着を掲げる会社としてこれからも切磋琢磨していけたらうれしい。そんなふうには地域を深く知る仲間が広がって、新たな情報発信のかたちが生まれたら面白いと思うんです」

地域を愛してやまない編集長はそしてまた街を飛び回る。泉州から繰り出される、次の一手が楽しみだ。(松岡理絵)